

ドビュッシー：ヴァイオリン・ソナタ

ドビュッシーは最晩年に様々な楽器のための6つのソナタを構想したが、それらは結局、3曲しか完成されなかった。本作は死の前年の1917年に書かれたもので、ドビュッシーにとって生涯最後の作品となった。第一次世界大戦のさなか、荒廃した世相と迫りくる自らの死に対峙し、しかしそこから解き放たれるように自由な旋律が紡がれていく。ふと香るスペインの調べが辞世の歌に気高さを添えている。

バルトーク：ヴァイオリン・ソナタ 第2番

早い段階から創作に民謡を取り入れていたバルトークは、40歳をむかえた1921年頃を境に、それらの素材に内在する語法と西洋音楽の語法の融合を目指して、より抽象的で現代的な作風へと足を踏み入れた。ヴァイオリン・ソナタ第2番（1922）もそうした作品の一つ。ヴァイオリンの技法が尽くされた、詩情をともなうラプソディ風の第1楽章と、目まぐるしく曲想を変える舞曲風の第2楽章からなる。両楽章は切れ目なく演奏され、第2楽章では第1楽章と共通の素材を用いることで全体の統一が図られている。

ミヨー：バレエ音楽《屋根の上の牡牛》（ヴァイオリンとピアノ版）

もとはチャップリンのサイレント映画のために作曲されたが、コクトーの台本・デュフィの舞台美術によるバレエ作品のための音楽に編曲された。明確なストーリーはないが、2年間のブラジル滞在時に接した音楽の影響が感じられる、おどけた賑やかさのなかにも一抹の哀愁がにじむ作品となっている。1920年、パリのシャンゼリゼ劇場で初演された。